

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

JAPAN

Tsujimura

畫本西遊全傳

三編

七



人遠21

2500

40-27



油清



繪本西遊記三編卷之七

岳亭丘山譯
君王進上論姑邪

心主夜間修藥物
諸夷行者近侍小伴從て皇宮内院入宿宮到而外あ立て
二條の金源を官貞み與へ教て是を聖躬の左の手のす脉開脉尺
脉二部の上ふ著させ線の頭を格子より引出させ行者右の手小是
を剣掌左の三指を以てす劍尺の二部の脉を試し又教て右の手三部
み是を著させ行者左の手を用ひて併一是を試し終ふ毫毛毛を
以て我身み返く高吉み嘆下々の階下の尊す惱左のす脉強少
て緊う閔脈弱ふと緩尺脉號ゆと沉と右のす脉浮ゆと弱ふ
や爾脈遲ゆと併尺脉數ゆと辨うり此病驚懼と有り亦ハ愁
思ふ更有て歎うれ故なり是を名はて雙鳥失群の症とりの国王是



悟淨が心を歡喜思ひに已を發して曰く餘が看處誠に明るり
早々藥を進め奉り行者徐々とて腰を下し奉て藏行者を待
構て君王の病を問行者曰く老孫国王の病と診附へ病根を悟り
此故小国王我の藥を求めゆく所く調て是と獻ん此時一個の医官
走り行者小向ひ長老今何様の藥種を用ひゆや要ふ隨ひて掣
走ん行者聞て怎生一方ふ限ん藥を見た則ち用ひ何程ふても把
まひ医官が曰く藥は都て八百八味あり一個の病め那ぞ盡く用ひ
理有ん行者聞て古人曾て云う事あり藥不執方合宜く用ひと以故
め全く藥品を記し然後加減さゞへ医官再度問答小及び藥品製煉
の處と會同館へ送つ處へ國王又三藏か勅して聖僧の殿中ふ在
て我と聞説へと止めゆく行者師父お別れて會同館め飯を八戒
の處と聞説へと止めゆく行者

悟淨が夏の始終を説談二個晩斋を吃終て半夜の頃小到り行者
先一両の大黄を取て悟淨が金ト細末せしも亦一両の巴豆を取て
膜を去權みて油毒を去せハ戒か命ト細末をも一個制本終
々と行者一箇の花磁盡と八戒み與へ汝此器の鍋腑灰と半盡胡
け入て走べハ戒頃て鍋腑灰を取来る行者又花磁盡を八戒ふ
へ安足を以て白馬の尿と半盡取来ヒ八戒呆て馬の尿を怎麼に
るや行者曰く藥を丸せんと呑クと悟淨笑て師兄病人を弄ア
都ムと慰ちや馬弱鮮くと脾虚の個一般這を喰時へ乍ち小呑ヒ
せん矧や巴豆大黃鍋腑灰の類ひと交へ用ひを上より叶一下ふへ
べ斯の如くと豈病の愈る有んや行者曰く我白馬尋常の馬有
治癒ヒ是元東海童神の化身う他が便溺と用ひ時の奈何う病



トノトモ愈きる更きハ戒是と聞て畢ふ白馬の傍み至り益を持て待
伺ひ半時をかり過せども馬更ふ尿をせば沒奈何て立候り行者小向
ひ大哥おほきく今帝土の療治らうぢちる更を止て白馬の療治と先へせよ這
廻まわ鏡かがみ告しのぶと一滴いつてきの尿うも下ささに行者聞て歎子亂嘆あわざわを止よ然ぜんが我行
く取う来くわんと器うつわを取うて白馬の前まへお到いたり少時すこの間まふ尿うを取う来くわり茱すみ種たねと
搔か交かわて二粒ふたこの丸まる茱すみとさく器うつわふ納なめ其その夜よの個こ々ごご歇くつスくて天あ明
るま及まんで國王衆臣しゆじんを宣あらわひ你な們な急いそき孫長老そなろう方ほうか到いたり茱すみと
受うけ取う來くわんと衆臣命しゆじんめいを請うけて會同館かいどうかんお到いたり行者ぎょうしゃお見みえ并ながれと來
くま行者ぎょうしゃ彼かれ丸まる茱すみと納なく器うつわを官貢かんくわん車くるまお與よへて曰いく此丸茱すみ是
鳥金丸とりかなまると号いく無根水むねずみを以もつて用もちべ群臣ぐんじん曰いく無根水むねずみとい奈何なにう
物ものぞ我們われわれ是これを知し行者ぎょうしゃ曰いく地ぢみ有あ處ところの水みず悉すべく根ね有あ只ただ天上てんじやうよ

と降おりて赤あか地ぢみ落おちる死死の雨水うすい是は無根水むねずみと名なく群臣ぐんじん拜謝めいしゃと朝
お飯おはんと彼かれ丸まる茱すみを獻ささと行者ぎょうしゃが教うながと述のべて國王即そくち當駕官とうかんを喚
くま兩ふたを求めむと急いそか印いんを借くわび咒語じゆごと唱うたひと勿む心こころ東ひがしの方ほうへ一盃いちまいの烏
雲くも一群ぐん起あて會同館かいどうかんの上うお到いたり雲中くもちゆうふ声こゑ有あて東海龍王とうかいりゆうおう故廣大
聖せいの旨しすす因いんて未みらう抑おの何なん水みずの幹幹更またありや行者ぎょうしゃ曰いく今朱紫
國王病くわうあり依よて茱すみを獻ささふ些すこの無根水むねずみを求めんと欲ほきを設つくり兩
を降おりて涼すずふ無むへく茱すみを覆あわよ竜神りゆじん告しのぶて曰いく大聖の呼よみ
依よて那幹なも年としへに赤あかりまを雨あめを降おちてき器うつわ一品いつひんも持もつ奉まつり行
者が曰いく許ゆる兩ふたを求めふ非ひすよ只ただ些すこの茱すみを用もちり程ほど有あを幹幹
又またせん畜ちく神じん曰いく既既如斯ご我些すこの噬の吐ぬて渠く茱すみを用もちり也よ

行者滿心歡喜最好々々竜王是を聞て又烏雲を起て白王宮の
上ふ到りて一口の唾と廿ヶ毛毛化して甘霖水とうつて降下る宮中
文武の官員後宮の官女ども是を貞見て手々小器を捧げ座上に立
出で彼兩と受へて一時許ゆて都て是を一集みて一箇の器ふ納
るふ許支の無根水を得て國王歡喜で彼鳥金丸を二度用ひ
タリを俄ふ腹中鳴響き写糸を束観て病根残らず終
了些ての米飯と食氣を養ふ事頃して心的實見養して衛營調
和脚力強健うる龍床を立て朝服を着て殿上ふ出ニ藏ふ見え
身を倒て拜謹。趁早官員か命、と行者が筆二個を旨ませ方ふ
酒宴を安排て師徒四個を接待国王と初として文武の百官后宮
の官女都鄙の人民ふ到り迎歡喜の色止時より行者車カタマリ先孫昨

日陸下の脉を診まうふ懈く病の因を疑ふ食と審ふ詣美吉又を得
ヤ国王曰く家の醜外ふ露をべうほどと云ふ然ども神僧の我余を
故ひ人う那ぞ覆造んや募人元末深く爰まう處の金聖皇后と
云て義人有三年前瑞陽の節我花園の裡み海榴亭と云あり爰余
皇后と俱ふ角黍を食酒を呑て樂居ふふ忽然とて一陣の風
吹起す一箇の妖怪現じ出自ら名宣て曰く我は是麒麟山の禪房
洞ふ居住まう賽太、歲大王とりふ者う你が金聖白皇后義人う
夫と聞及び是を得んら爲未う早く我ふ其皇后を與へよ儂
與へざる時ハ先你と食ん其後一國の人民都て皆食尽らずと言
る我其時金惜ふり有さむども罪ふき二國の人民を渠う爲ふ亡き
人吏懲く奈何とも可爲やうるく終ふ金聖を亭の外へ押出

を彼女怪乍ち白王后を掛懃^{ハシキ}と我此爲小驚怖^{コロコロ}と更少く
又彼角黍の類ひ腹中止滯^{スル}日^ハ白王后の更愁り思ひて日
夜是^ニ心^ム古^ム此故^ハ深く病を得て二年小及^リ死^ム神僧^ト
良藥^ヲ服^ム勿心^チ病愈^ム當下本身^ハ復^リ古^ム是^ニ皆^ハ唐僧^{の贈}
行者聞^ム今金聖白王后^ト以^テ國^ヘ返^フ一度^トハ思^ク古^ムを^タ國^渡
を流^ム云^フや及^ハ我此古^ムを思^ク古^ム切^シ夜^ト無^ク昏^トく^レ憧^ク
々^ト意^ム思^クと絕^ム間^ニ然^トども一個^トと^レ彼女魔^ハ敵^ミべき臣^ト
家^ト行者聞^ム我陛下^ハ此女怪^ハ退^{ハシム}白王后^ト以^テ國^ヘ
奈^ハ何^ニ國^王是^ニを^タ聞^ム倘然^{アラカニ}あ^ハ此國^ヲ你^ム讓^フ帝王^ト
稱^ム我^ハ臣^ト成^ム行者又日女怪白王后^ハ招^{ハシム}行^フ後一向^ト
音耗^ハき^マ國^王曰^ク他先年五月金聖白王后^ハ招^{ハシム}行^フ又十月^ト
到^{ハシム}兩個^ハ宮女^ハ白王后^ハ宮仕^ハ駆^{ハシム}と求^ム故又兩個^ハ宮女^ハ遷^{ハシム}
去年又三月末^ニ二個^ハ宮女^ハ要行^ム七月重^ニ二個^ハ要^{ハシム}去今年
二月亦末^ニ二個^ハ宮女^ハ要^{ハシム}行^フ詞^ハ未^ハ終^{ハシム}處^ハ南^方方^ト
一陣^ハ風吹^{ハシム}登^{ハシム}々^トバ國^王初^ハ文武^ハ百官驚^ム懼^ム得^ム女怪^ト
又未^ハ終^{ハシム}呼^{ハシム}皆^ハ後宮^ハ逃^{ハシム}々^トニ藏^ハ國^王と俱^ハ身^ハ
匿^{ハシム}八戒悟^{ハシム}淨^{ハシム}逃^{ハシム}と^レ行者扯^{ハシム}住^ム併^ハ少^シ時^ハ差^ム在^ト女怪^ト
怪^ハ伺^{ハシム}見^ム制^{ハシム}二個^ハ役^ハ奈^ハ行者^ト俱^ハ立^{ハシム}定^ム而^ハ虛^ト
空^ハ眺^ム立^{ハシム}處^ハ乍^ハ黑雲^ハ間^ニ焦^ム回^ム金^ハ鑑^ム女怪現^ム
行者^ニ二個^ハ向^ム女怪^ハ在^ト待^ム我先女怪^ハ對^面せんと
勧^ム斗^{ハシム}雲^ハ不^{ハシム}飛^ム乘^ム空中^ハ升^ムアリ

姑^ハ唐^ハ賓^ハ放^{ハシム}烟^{ハシム}沙^{ハシム}火^{ハシム}

悟^ム空^ハ計^{ハシム}盜^{ハシム}紫^{ハシム}金^{ハシム}錢^{ハシム}

却説行者ハ鉄棒を持って空中に立て太金色だいじきいろふ喝かくて曰く「你何里うりより
来きしる妖怪ようざいぞ彼かれ妖怪ようざい色いろを勵あおぐと曰く「我われへ是これは別人うりんとすが乃なち麒麟きりん
山獅さんじ牙洞がどう賽大歲さいだい大王だいおうの部下ぶげの先鋒せんぽう今大王だいおうの命めいを受うけて差さしこふま
て官女くわんじょ両個りょうを把行ぱぎゆうて金聖娘きんせいな侍し御ごせしめんと既そも抑おさ又また你なへ何なせ
よどバ斯妨逆スカウゲと做すや行者答こたへて曰「我われハ乃な齋天さいてん大聖孫悟空ごくう我われ
師兄しゆう三藏法師さんざう西方せいがた小往こうむかて心こころを拜まつり徑とうを取とく路じ上じょう此國しこくを過とる
死死ふ你なホホ然ぜん惡行おきを房ぼうて片腹かたはら疼いたく此國しこく小荷擔こしょんと退宿たいしゆくせんと思
ふ知しふ魅ま心こころ々々甚方じんぱう來くて我われ命めいを送おふ不敏ふびんううと呼よアモクシアモクシ妖怪ようざい
大おの小こ賢ひり有無ゆむを言いひ長ながき鎗やりを取とて突つてかかるを行者ぎょうしゃの鉄棒てつばを揚あげ
相迎あい空中くうちゅう小在こざて戦たたかひ度ど二三合にさん彼かれ妖怪ようざい行者ぎょうしゃが棒やりと架くら外ほかと長ながき鎗やりを
兩截りょうさいみ折おりせ慌忙はんぱう廻まわて西方せいがたへ逃と失う行者ぎょうしゃ有あり日ひて是これを追おひ雲頭くもよ

下さま來くり叫さけて曰「師父請陞せいへい下さと同ともく奉まつり入い妖怪ようざい逃とうと呼ようけ
せば唐僧とうそうハ君王きんわうを抜ぬけて同ともく穴あなを出来できて見みを滿天晴朗まんてん小こ絕絶
妙邪めうじや氣き國王こくわう大おり小こ歡喜かんきと筵宴いんえんを設あけ自じら玉たまと拿な金きん杯ぱいを
把ぱて行者ぎょうしゃ小こ進しんめ神僧しんそうの妙力誠めうり感かん謝せきこ堪かんば行者ぎょうしゃ杯ぱいと接つて未ま
持も持も金きん杯ぱいと酒さけ有あり但ただし空中くうちゅう小こ投とう上あげば且また暗くろ的てきと音おとと杯ぱいを
地ぢ小落おち國王こくわう慌忙はんぱう向むかて云い大聖だいせい何なぞ杯ぱいを投とうすや我われ死死爲爲小腹こらへ
主ぬし有あてう煩心ぼんしんううと曰いへ行者ぎょうしゃ独ひとり笑わらて答こたへて安やす然ぜんとくくて在ゐる知しふ
又また一個いつの官員くわんいん來くて報ほて曰「當下西せいの朝門あさがたの起火きか俄おの一場いちばの大雨おおあめ降ふ来く
盡つくく消滅しょうめつ何んなん不ふ彼かれ大お兩街りょう中なかを流ながす水みず都と尽つくく酒さけ臭におく何んなん不ふ
と云い此時じ行者ぎょうしゃ曰い「是これ彼かれ妖怪ようざい西方せいがた小こ逃とうと我われ曾もとて他ほかと



金瓶梅

卷之七



金瓶梅

卷之七

七

遂に依て彼妖怪火を起らるゝ老孫国王の賜アリ一杯の酒を
投て即ち妖火を滅シ故テ西の朝門の市街ナリ何の別条ある
んや国王十分分懽喜猶百倍の敬を加ヘニ藏四個と宝殿小請上
らせ万望唐僧ふ國主讓アモ天子と假ルと云行者笑ひて曰く未だ
半々其如ふ到ビ彼賽大歲大王部下の妖怪とも不妄時押寄
まへ一我今這方より遙寄と空中ナリ於て擒フ一未ん不然ハ許委
百姓を騒せ陛下をも驚ケ奉ん唯這方より推羅て金聖白王ナリと
取回一未ん但知ビ彼山洞ナリ行程考計ラ有サムン国王曰く寡
人曾て那里の里數を聽ク往來五十餘日爰少三千餘里あり行者聞
ク八戒沙僧小向ひ你ホ師父を護持トシ爰ハあも我ノ那地ナリ趣ん
と云を国王扯住て神僧旦寛キトス度タ此計の安排ナリ宿也草
どうも忘生這般の法カアリヤ行者曰

我身雖是猿猴數
徧訪明師把道傳
倚天為界地為炉
採取陰陽水火交
全仗一天罡搬運功
退煙進火最依時
攢簇五行造化生

自幼打閻生死路
山前修煉無朝暮
兩般茱萸團烏兔
時間頓把佐閑悟
也憑斗柄遷移步
抽鉛漆汞相交顧
合和四象分時度

二氣歸於黃道間
悟通法律歸四肢

往來霄漢沒遮攔
一打十萬八千路

三家會在金丹路
本末効斗如神助

國王以詩を見て日驚き旦惟び許交うち吟丁ド一杯の酒を着て行
者小兵へ神僧遠国へ旅立すの骨折を謝せん行者一心唯妖怪と降
伏せんと思ひて速ふ一杯を吃て空中に向て吻哨と一色寂然と
して形の見ざ一国の君臣上下唯奇異の思を做ぬ斯て行者の効斗雲
ふ打跨て快くも一座の高山ふ到り即ち下て巔峯ふ在て仔細を得
と観ひ正ふ洞口を尋んと欲る處ふ只見此山の凹うる知りて烘々と
火の光飛出づる要時ふ天を爛紅焰あり又紅焰の中ふ一條の悪煙を
翳ひ出づ此火甚毒火と見るふぞ大聖自ら恐懼せり又此山中ふ道

の沙を迸り出ると眞小天を渡り日を蔽ふ行者見どゆ一回小甘
を解ひ頓て身を変ひて一個の攢火的鵠子と成て烟火の中ふ飛入
萬劫萬駆回り烟火沙灰を吹散て衝々烟火聞けて本像を現す下
アと見を只叮叮噠噠と銅鑼の声を聽ぬ處り是妖精の巣穴か非
だ銅鑼の声へ是兵を布の銅鑼相やかに通國大路小丘を出づて
有るくんと猶急ぎ行なう處ふ勿心ち一個の小女児黃る旗を立背上
小書簡を帶て銅鑼を敲みりきる吏走ら如くきく行者又身を
えびて一個の道僮とく頭の双扒髻あ結身ふ白衲衣を着て手
ふ木魚を叩き口不道情詞を唱山坡を轉て彼小女の行迎誓
首でりの長官那里へ行ひや又持りふへ怎麼の公文するや小女の
銅鑼を打止笑て礼を返てりふ我背上小負の朱紫服へ送つ戰書

きり行者曰く何故小戦書を送りて鬪んとくもや小女郎曰く
 我大王三年以前朱紫国小到て金聖白王后を奪ひまつゝ圍の衆ふ爲
 んと思ひて一個の神仙まで一件の五彩の仙衣と白王后を金の宝箱を
 着ゆるを總身都て針刺を生で我大王敢て摸ても見支能ひ度但
 此少も手を著せば手心疼て堪へず此故ふ二年の今日まで未
 ご身を沾さば大王没奈何又朱紫國より外の宮女二個を要來
 し竟か弄そ殺し其後又二個の宮女を弄そ殺し今年又要小遣す
 を今般の孫行者が爲小打破して宮女を要來此故ふ我大王夫
 りふ齧て彼國を責めさん爲ふ我をして戦書を届けんとす朱紫
 国王若戰ひて美人を送りて和睦せば造化す戰ひて魯管を利非
 云ふ王烟火飛吹を以て責めり彼國王臣家を首め百姓ふ小到る
 すを一個も活る者有べらず其時我大王の朱紫國の太子と爲我
 們の臣下と做へ然ば明日合戦す快く戦書を届けべと云捨て
 まつて行間終て行者鉄棒を拿出す小姑的後身す唯一打小
 討殺す立を抱て胸へ扯下すときす時口ハ聴暗田的と一吉等て金を
 握る牙牌落す牌上ふ文字すまつ曰く心腹小校一名有ま有去五
 短身材丸撻臉無鬚長川懸掛無牌即假行者是を見て行丈ひ此小
 好的名と有ま有去とすが然るか今一根小打殺せり云々有て走
 すと云て牙牌を取て腰に付銅鑼と旗と六草裡ふ藏し置號戦書
 を取て袖ふ納忽ち又烟火の毒を田心ひ出一敢て洞門を尋ねて有来去
 グ嚴を鉄棒ふ拴つて着其傍に空中ふ飛升し徑ふ本国ふ坂を且
 つ蜀の頭功の手柄を當報べと吻哨と登せりと朱紫國小歌り金

金聖皇后
ひめごときわどせり

獨思古御
ひとりこきむとせり



寶殿ひんぢんふ到のり彼かれ一封いちほうの戰書せんじよを二藏にざうの神かみの裡すみふ推入すいに收置しゆちて師父しは日國ひに
王おう小見こみせををみと云終まつさうをふ國こく王殿おうでんを下さすと行者ぎょうしゃと迎むかえる神僧しんそう快かい
帰かりひづる傭女怪きよめのけの動搖どうよう奈何行者ながぎょうしゃ地上じやうじやうか指さて那階なかい下げの女精めいせい
打殺うちさて置おきと云いを國こく王おう是これを見みて是これの這賽太だいさい非ひ這賽太だいさい
歲としの寡人くわいじん親おやぢ認にん得とど身尺みし凡ふ一丈八尺いっしやくはつ計けい面金光めんこんこう有あて吉澤靈よしざわれい
の如ご行者ぎょうしゃ曰いく是これの這一個だいいちの報事ほうじの小姑おひめ的てき旦たん血祭けいけいふ打殺うちさ
手始てぢの功ごを告奉ごうほうる國こく王おう大だい小こ歡喜かんき度ど好す々よくよく神僧しんそう一度いちど出でて速はや功ご
奏さう返か未ま來ら寶ぼう神通力じんとうりき先さ々さ酒さけを爛らんめて甚ごん功ごを賀たま宣示せんじん
行者ぎょうしゃ曰い酒宴しゅけん置おき我わ第一だいいち階かい下げ問たず奉ぶ金聖王きんせうおう后ごと別べつ
ふ時とき甚ごん麼う表記ひょうき取と交こうひひと國こく王おう表記ひょうきの二事ふじを聞きようと
心こころ究くわ思おもかて堪か兼けんて渡わた下げア口くち管かん泣なみて謂いて曰いく

當年佳節慶朱明

強奪御妻殊倉卒

大歲凶奴忽震聲
誰留表記繫離情

是まを聞きて行者ぎょうしゃ曰い娘むすめ既既小表記ひょうき然ぜんば彼君宮中うきやう中なか在い一時いつ甚ごん
麼う身み小換こかんて愛あい一物ひともの有あて國こく王おう曰い是これを問たずて怎どう麼う爲あ行
者ぎょうしゃ曰い彼かれ女めのこ王おう室しつ小神通こうじんとう有あて當田難とうだなん一假うそ今いま能の量りょうを爲あ果ごとと
娘むすめ我わ面おもて到いた彼かれ娘むすめ平ひら日ひ小こ心こころ不ふ愛あい給あた一物ひともの見み見み是まを信しん給あた彼かれ娘むすめ是ま小こ依よて彼かれ娘むすめ是ま小こ依よ行ゆ國こく王おう曰い昭陽宮しょうようぐう裡すみ振壯閣ひんじゅうかく上う
小こ一隻いっしの黃こな金きん宝串ほうじゆ有あ是ま金聖常きんせいじょう小こ帶たる如おの物もの是ま被は奪だつ日ひ
端午こどの三節さんせつ會あつ日ひ續つづ命めい五色ごしきの絲いと腰こし小こ縣けん小こ依よ脫だつ日ひ
是ま之の他ほか常じょう小こ愛あい一物ひともの行ゆ者ぎょうしゃ曰い然ぜんハ其その金串かなじゆ老ろう孫そら

小給つて候へ國王遂小玉聖宮小人を遣して是と取出させ見る國
王忽ち彼下ア最愛や娘と幾喜泣て遂ふ行者小通與り入行
者是と辟月小懸心て功賞の酒も呑び勅キ雲不打勝て吻哨と一色
又去て麒麟山へどきり到る頃て洞府を尋するか只人語の喧嘩と聞
立て猪と疑し觀看を原未解身洞門の口みて大小の頭目あり
紛摸五百名餘と爰小座て保守居ア行者是と見て頭回し舊
路小到り御嚮小奸的を打殺する死不到り黄なる旗と銅鑼を披
出レ即ち身を変じて右未右去が像と做徑不前と行解身洞小到
り猩々出でり右未去你回て未バ快ハ行大王ハ剥皮亭上
不在て你を等々行者又銅鑼を鳴と一の門に入忽ち頭を撞て
一座を見バハの密明クふと亭子の中間小一張の餞金の交椅あり倚
子の上小端座する魔王あり生得惡像うり行者見みぐる傲慢ふと
些の礼をも做ざ外看そロ、管銅鑼を敲き居る魔王向て曰く你
来せと云ども行者答ざと又向て有未去你ましと云ども尚答ば
魔王堪兼て上前出扯住りて曰く你怎麼答ざるや行者曰く元
来我不去と思ひと大工却て那里小我を遣てうり行て見小限る
き人馬陳勢を張て我を見より推つ扯つ遂ふ擋て城の内小擔込
シ彼國王我を見て則ち斬んと云ふ幸ふ両班の謀士ありて曰两家
相争時未仗と斬ざと遂ふ我と饑一戰書を收て城門の外小押
出レ二十枚鞭打と今放しと還つ候ふ斯動靜ふては遠らば那里
送寄ふまう戦べて魔王曰く然を彼國多かの人馬あうや行者曰
く我甚ぞ詭き昏て友收の人馬有づ深く覺えば唯彼國ハ兵番

森々と羅列する古文麻の生うるぎ如一姫王笑て曰く假令那程の兵
有とも我宝貝ノ紫金鈴を打搖て烟燐火を起し彼國を鑿ふ為
べき事々你へ今すより後宮か往て金聖娘々お報ん小言べき事あり
既ふ我彼國を責んと云を聞て位非心にて在うり你往て今見て
他既ふ我彼國を責んと云を聞て位非心にて在うり你往て今見て
まゝ通り彼国人馬驍勇かと嘗て此國不勝んとりへ日々一時他
心を寛むべく行者聞て為悔うると思ひ此更十分中意とて則ち脚門
を過廳堂と越見べ以邊迄て大廈高堂以邊の摸様とて大ふ替
き直ふ後邊の宮裡ふ到どを宮門の壯麗うる是則ち金聖主皇后の住
居うる裡ふ入て見べ両班の妓狐妓鹿個々都て美女の形ふ宴下群
ひて左右小侍立せう中間ふて金聖娘々手づら香腮を托け双眸
まくらふ玉容寂寥胭脂冷雲鼻蓬鬚退黛空自山古江
高波果然うる玉容寂寥胭脂冷雲鼻蓬鬚退黛空自山古江

顔ヲ交薄命懨々無語對東風行者上前て言宣示んと云を金聖娘々
の曰く這怪的十分無礼う思ひか我今すで這樣う怪的を見
ぞ是怎度うり野歎うりや衆婢上前出てりふ娘々怒うを止うへ他
左是大王爺々腹心の部下名の有未去と喚的う今般朱紫國へ
戰書を送りきの仗ふ行ト金聖此一怒うを忍び問てりふ你戰書を
下て曾て朱紫國へ到アや行者曰く老孫戰書を持って徑ふ金盃殿
お到り向頭國君お見候ふ金聖曰く仰國君お見えて君王何と曰
ひつぞ行者曰く彼戰鬪の戻り既ふ大王お報上うり婦人お聞え上
さふ及ぞ唯那君王娘々的の戻りと思想言傳の一言宣示上うり然イ
左右の人の聞と奈何金聖是を聞て兩班の妓狐妓鹿を退け行者
を近着まへた行者前倚て本像を現し金聖お向て曰く娘々我と怕

也。我れは是東土大唐とうとう西天せいてんへ往むかて佛ぶつを見みえ經きを承うける和尚おうこうて孫悟空そんごくうと呼よ做なす。我師父がしふ你の國くに中なかを過くわる。小依こよて閻文えんぶんを揃そろひ。せ一處ところめ你の姫王ひわう小掛おがけ来くわり。更さらと問たず。國君こくぐんの内うち小依こよて一般尊おんぜん躬みじめを救すくひ。國くにを出でん。進すすせんと依よて彼かれ仗とも者もの有あ。來去らいよと變かじと爰あ。至いたり僕わたくらとり。金聖こんせい高沈吟たかくにんして疑うなづき面おもて色いろを行おこな。那な室甲しつこうと取と出だ。進すすせんと金聖こんせい見み下くだり。淚なみだを垂たれしと流ながす。座くわを下さすと拜まつ。長老じやうろうを我わを救すくひ。國くにを出でん。大思死だいししへと亡なき心こころへ。行おこな者もの曰い。些すこも放心きんしん有あべ。但ただし此國このくに有あ處ところの火ひを放ほち。烟えんを出だす。汝なを降おはし。是これ怎麼どうの寶貝ほうひ。金聖こんせい曰い。那なは是三箇さんごの金錢きんせん。彼かれ一箇いちごと持も打搖うちゆうを二百丈おぢうの火光ひこう登のて人ひとを燒や。第二だいにを搖ゆうを三百丈さんぢうの烟光えんこう登のて人ひとを熏くらす。第三だいさんを搖ゆうを二百丈おぢうの黃沙こうさ人ひとを迷ます。烟えんと火ひを還もどす。不打緊ふうちまん。

と雖まも唯い彼かれ黃沙こうさ最さい取とり人ひと小妻こめい。倘ま鼻はなの孔あなが入は時とき。乍まち命いのちを失うふ。行おこな者もの曰い。利害りがい利害りがい。我わ曾もて斯このる錢せん。更さら知し。其その金錢きんせん。今いま何なに處ところ有あ。金聖こんせい曰い。如ごと外ほかの宝貝ほうひ。金きん。大王だいわう腰こし。小帶こば。行住座ぎょうじゅざ。臥身おひそみを放ほ。行おこな者もの曰い。你の倘ま故ゆゑ御ごへ還もど。思おもう。忍しのて大王だいわうの心こころ。從つひ敷ひふ。而と彼かれ金錢きんせんを預あ。而と我わ是これを取と。而と後あと你の國くにを出でん。金聖こんせい聞きて是理ことわり。我わ能のて數かぞて預あ。而と惟まことに喜うれし。而と行おこな者もの。原はらの有あ奉まつり。去くわと。變かじ。左さ右うの侍婢じし。呼よ出だせ。金聖こんせい愁うと有あ。向むかひて。曰い。大王だいわうと請ね。去くわと。變かじ。左さ右うの侍婢じし。呼よ出だせ。金聖こんせい愁うと有あ。惟まことに喜うれし。而と娘むすめ。常つねふ我わを。言いふ。喚わく。怎麼どう。而と今いま日ひ斯この執つか。懶こな。我わを招むか。而と行おこな者もの。曰い。彼かれ朱紫しゆし國くにの。支しを。問たず。故ゆゑ我わ能のと。偽うそつて彼かれ

欲奪寶
聖奴怪
進酒

貝金



國土最早別ふ白王后を刪きて竈爰盛んうと說話候へ娘々今へ
慕ふ心も役果て直下我小命て大王を請ひ奉るうつ姫王是を聞て
懽喜你の害か大功的う我彼国を得ば你を以て太宰と爲べ行
者此言ふ從ひて因心を謝し支う姫王と俱ふ後宮小到び金聖有
歎顏色ふて出迎へ手を把て相携りへば姫王曰く亦娘々の身才障ふ
我身の疼痛を怕るうと云べ金聖曰く怎麼這樣の更に日み
や旦座小請う我君ふ說話あり大王我を愛へる古ヌと雖も示
ご枕を傳ふせざる其仔細へ我朱紫國あ在とき一時も外國よりの貢物其
外何ふ依よる大王先看終て我ゆめ看せ我預りて收め置古ヌ此
國こ小二箇の紫金鈴しきんと云る宝貝ほうひあとと因きぬ大王我おも爲覺あ
一給きりを看み給さりて况なや尚預まかりて借老からの勞らを做す我おも

かち然かちとての薄情うすじき一弊故ひきのう小我尊そん意いふ從つひて男おとことりふ者ものを疑あひ深ふかき者
きりと恨泣うらみのこゑて曰ひいひととば妖王忽ち軟なん腰こしと成な態たいと大おほりふぞて曰く娘
娘むすめ管くわんば恨うらみる更さらうも我宝たから貝かいへ腰こしふ着きて則そち這はふ有あ今日當あふ你
み收預まかへと則そち衣きぬを掲かげひしと行ゆ者ものの後邊うへふ在あて暗くろり
轉うねりぞ看み看み居ゐ姑お王おう兩りょう二層にそうの衣服いふくを掲かげひ三箇さんの金鈴きんを取とて
些すこの本綿もとわたを以もつて口くちを塞ふさぎ一箇いつの豹ひつじの皮かわの包いとう袱ふく見みふ包いとう三金聖さんふ通つ
裏うらて曰く能の々心こころを用もちて藏くわめ置おきひ人ひと必ひつを擱かくひの金聖さん是これを
受うけ取とて我良納處がんのうしょありと化粧殿けぞうでんの上うへふ藏くわめ置おき小的ちのと呼よて酒さけ肴さかなを
安排まへり金聖きんせいの増ます日々好焼うる愁うる姫ひ王おうふ着き精靈せいれい行ゆ者もの
其間そのあいだふ遊あそ墓はかみ近ちかき彼かれ三箇さんの金鈴きんを拿なて輕かる々と持も出だ一宮門いっ門もんを
出だて神皮亭かみの前まへする人ひと無處むふ到いたマ豹ひつじの皮かわの袱ふく包いとうを聞き見み茶鐘ぢやう

のあさり。金鈴二箇あり。木綿の裁布を以て甚口を塞ぎ。こう行者
利害も知らず。彼本錦の塞を三箇一齋。お扯り。とを乍ち一王巴の
譽有て。烟仙火の三箇の一齋。お逆る悟空急。お是を收る。古知
を亭中。烘々として火起つて。紅光天地。お羅けを。小姑的周章。大王
お告来る。姑王驚き。起て。お能々見を。有未去金鈴を。盜未て。矣
小丘。妖王大いに怒り。己戮。奴大膽。我宝貝を。盜なり。小的。ども。勝
拿よと呼。お氣を。小姑的の者。おも。是を。房一齋。お持て。かく。行者
お金鈴を。投捨て。本像を。現し。金竹施如意棒を。掣て。打て。廻る。好
王。お宝貝。と。取収て。門々。と。嚴く。閑固。道。と。取巻。と。行者の道
を。出る。道。と。鉄棒を。收め。身を。豪。と。蒼蠅兒。と。うり。の無處。
壁上。お住り。其方。動靜。と。伺ひ。小姑的行者。を見。失ひ。隈々。を。尋ね

捜せじ。も。不知。妖王。是。を開て。斬門々。を。緊く。鎖。と。小那。而下り。逃走
たり。や。抑渠の。那。拘。と。ぞ。大胆。ゆ。有。未。去。と。寢。と。我。小。朱紫。目
の返。呑。と。告。機。小。衆。と。宝。貝。と。奪。す。る。や。既。ふ。這。山。の。上。ふ。在。て。烟火
を。放。ち。風。ふ。吹。ろ。と。賣。う。と。ば。我。連。む。當。べ。と。店。先。鋒。白。文。豹。が。曰。く。又
定。是。の。孫。悟。空。う。べ。と。想。ふ。堅。ぞ。路。上。ふ。て。有。未。去。ふ。遇。着。彼。殺
一。洞。罐。と。旗。と。を。奪。ひ。取。然。と。と。有。未。去。小。寢。と。賣。う。大。王。を。欺。く。も
の。う。ら。ん。妖。王。是。を。開。て。點。頭。正。是。正。日。三。你。ダ。云。死。有。理。う。と。小。姑
们。お。が。付。て。子。細。と。尋。搜。さ。門。々。堅。く。保。守。せ。く。つ。

